

編集後記

2003年はジェンダー・スタディーズ、女性学関係のお仕事をたくさん頂き、女性学インスティテュートには大変お世話になりました。2004年も引き続きインスティテュートの発展を祈念致します。世界では多くの殺戮が行われ、日本も生きにくい社会であると思つづく思う今日この頃。何かできることから始めなければ。(M. K.)

ことしは日露戦争の開戦からちょうど百年目にあたる年だが、いまあらためて驚くのは、この戦争が自分の生まれた年から数えてわずか数十年前のものであり、それほど大昔の話ではないということだ。いまの大学生に太平洋戦争の話をするのは、ちょうどわたしをつかまえて九十過ぎの年寄りが日露戦争の話をするようなものなのかも知れない。(S. T.)

日ごろから女性を育てる事には力を注いでいますが、「女性学」については全く無知でした。そんな私が編集委員をした事は、今思えば適材適所とは言えなかったと思います。しかし、それがきっかけで、私も今まで一度も開いたことがなかった『女性学評論』にも目を通すようになり、過去に頂いた『女性学評論』も読みました。ほんの少しだけ女性学というものがわかってきたような気がします。良い機会をありがとうございました。(S. N.)

二年間、編集委員をやらせていただいた。なし得たことよりもいただいたことの方が多いという、有り難い、しかしよくある経験をさせてもらい、感謝している。この経験が自分の内でどのように変貌を遂げ、熟成するのか、そして外に現れるか、甥や姪の成長を見るような感じで見守っていくような気がしている。(T. M.)

「教育」に40年近くたずさわってこられた六車先生に、寄稿していただきました。或る「区切りの思い」を持たれたことと思いますが、私には自分が、「人生のどの辺りに今いるのか」も、「女性学」もよく見えません。組織の名称を「女性、平和、地球市民」にしてみたらと思ったりしましたが、それでもやっぱり、よく見えないか(!)という思いです。(U. T.)

.....